

「留年ゼロ作戦」→「トコトンできるまで教育」

教学IRをきっかけとする教育改善の事例

鈴鹿医療科学大学 IR推進室

「留年ゼロ作戦」→「トコトンできるまで教育」

【改善のもととなるIRデータ】

- ・ 2013年頃の本学における留年率および退学率が高い傾向であった。
- ・ 退学者の8割は1～2年生であり、退学理由は「学業不振」が最も多い。
- ・ 決定木分析と構造的因果モデル（DAG）に基づく層別分析により、留年決定者の退学率が格段に高いことを確認した。

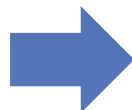


留年は教育的配慮のもとに実施され、退学を防止する効果を持つべき措置と考えられるが、留年決定が逆に避けることのできた退学を助長している可能性が示唆された。

【具体的な教育改善例】

留年ゼロ作戦

- ・ 可及的に留年をゼロにするよう各学科に要請。
- ・ 特に1科目不合格のみの留年者をゼロにするように要請。
→しかし、合格基準を下げて進級させるというふうに誤解が生じたため「**トコトンできるまで教育**」と名称変更。



トコトンできるまで教育

- ・ 全学生を定期試験までに合格レベルに引き上げるよう「**トコトンできるまで面倒を見る**」教員の熱意が大切。
- ・ 従来、本試験＋再試験1回で決めていた合否を、時間の許す限りトコトンできるまで試験と指導を繰り返した上で、合格基準をクリアさせる。（この際、合格基準を甘くしない。）

【教育改善結果】

- ・ 2015年頃からこの方針を打ち出し、2019年には大半の学科が協力。
- ・ 高かった留年率および退学率が2019年度にはある程度低下。
- ・ 留年率、退学率が低下傾向にある中で、国家試験の全学ストレート合格率は上昇傾向にある。
- ・ 退学理由において学業不振での退学割合が低下し、進路変更も低下。
ただし、心理的理由その他の要因は大きくは変わらないため、充実した学生総合支援体制を整備。